

インタビュー

商社による「研究開発」 ：長瀬産業R&Dセンターの取り組み

長瀬産業株式会社
ナガセR&Dセンター
センター長

りゅう しゃおり
劉 暁麗



「ズームアップ」欄は、「働く人と仕事」をテーマに商社各社のビジネスや人材をご紹介します。今回は、長瀬産業㈱の劉 暁麗氏に、同社の研究開発の中核を担う「ナガセR&Dセンター」についてお話を伺いました。

1. 入社から現在の仕事に至るまで

私は大学を卒業後、中国科学院で2年間勤務し、その後、豪州のラ・トロープ大学で、生物化学・分子生物学の分野で博士号を取得しました。この分野で研究が盛んな国としては、日本、米国、ドイツが知られていますが、中国にも近く、アジアの国である日本で仕事を探したところ、同実験室でSenior Research fellowを務めていた日本人の友人の紹介で、当社子会社ナガセケムテックス（当時はナガセ生化学品工業）で研究開発の仕事に携わる機会を得ました。来日してからすでに21年がたちますが、2013年に当社に転籍し、現職に就いています。

2. 商社が手掛ける「研究開発」

(1) 長瀬産業の「R&Dセンター」の役割

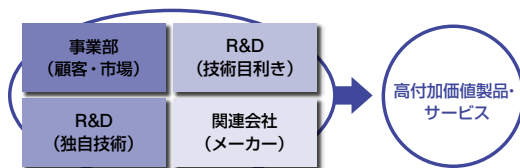
当社は商社ですから、顧客から「こういう

製品があればよいのだが」という要望があれば、その期待にできる限り応えようとするのは当然ですが、製品ニーズはあってもそのメーカーが存在しない場合や、新たな技術開発が必要になるケースもあります。こうしたマーケット・ニーズに応えるため、1990年に「ナガセR&Dセンター」を開設し、本格的に自社による研究開発、製品化への取り組みに着手しました。

当社は化学品を得意とする商社ですので、営業部隊も化学品についての知識は豊富ですが、新製品の開発に必要な技術・ノウハウの知識については、営業部隊だけでは必ずしも十分ではありません。こうした顧客ニーズを的確に把握し、製品化に結び付けるため、ナガセR&Dセンターは、マーケット・ニーズを踏まえた研究開発を行い、その成果を関係会社あるいはパートナー企業において製品化するための「インキュベーター」としての役割を担っています。



ナガセR&Dセンター



R&Dセンターの位置付け

(2) 長瀬産業の研究開発体制と研究分野の変遷

現在、ナガセR&Dセンターには約30人の研究員が在籍していますが、製造を担う子会社を含めると、研究開発部門は数百人の陣容になります。研究開発では、大学や公的機関の研究シーズに着目して、それを製品化に応用させる取り組みの他、自社による開発も手掛けており、私自身が特許を出願した研究成果も幾つかあります。当社の特許出願件数は2014年3月期累計では、国内861件、海外418件、取得した特許権は、国内199件、海外207件に上ります。また、他社の買収や技術の獲得においても、その技術の側面からの評価をナガセR&Dセンターが担うケースがあります。

ナガセR&Dセンターは、全事業のポートフォリオの中で、将来に向けた事業基盤の強化のために、新事業の創出に貢献することを使命としています。過去から現在に至るまでに、注力する分野は少しずつ変化しています。同センター設立当初の1990年代から2007年ごろまでは、キラル合成技術と呼ばれる、医薬品や液晶材に使用される技術の開発、それを通じた事業展開やライセンス収入の拡大に注力していました。その後、2007年から12年にかけて、食品分野の研究にシフトし、健康・環境配慮の二つのコンセプトで高付加価値食品素材・化粧品素材等多数の開発に貢献しました。

そして現在は、その延長線上にある研究分野として、従来、自然界から抽出する化学物質であり、環境問題や資源枯渇により供給困難になっているものを、遺伝子組換え技術を用いて、持続的に供給するための技術開発を進めています。

(3) 商社とメーカーの研究開発における違い

商社において研究開発を手掛ける場合、メーカーとは異なる商社特有の事情もあります。メーカーであれば、中核事業となる技術を発展させるため、特定の研究分野に



研究開発に使用するジャーファーマメーター(微生物培養装置)

集中する場合があります。商社は取り扱う製品が多岐にわたるため、研究開発もさまざまな製品に対応した多角化が求められます。また、通常、新しい研究成果を挙げるには10年ほどかかるといわれ、その製品化にはさらに時間が必要になりますが、商社の場合、研究にかけることのできる時間軸が短いという側面も否定できません。

また、当社の研究開発部門は、営業部隊と連携して顧客が求める技術の評価し、製品開発をサポートしています。私を含め、ナガセR&Dセンターの社員の多くは博士号を取得していますが、世間でいわれるような基礎研究に没頭する「タコつぼ」的な博士ではなく、営業部隊とも協力して顧客ニーズを探り、製品化に意欲的な「商社気質の研究員」であることも、特徴として挙げられます。

3. 今後の抱負

ナガセR&Dセンター長としては、今後も当社の研究開発の場を活用して、当社ならびに社会に貢献できるような研究開発を進めていきたいと思っています。特に、製品を世に送り出して売り上げを拡大させるために、当センター機能をいかに強化するか、研究開発の技術レベルを向上させ、事業の具体化に応える基盤をいかにつくっていくか、という点に注力してまいりたいと思います。

(聞き手：広報グループ 石塚哲也) 